

令和5年度 文部科学省委託事業
「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」

海からの

Message From The Sea

メッセージ

成果報告書



独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立大隅青少年自然の家

はじめに

この海からのメッセージ事業は、海や山が近い大隅青少年自然の家の立地条件を活かして、水深 200mの深海を持つ雄大な鹿児島湾（錦江湾）を舞台に、長期自然体験活動を通して青少年の自立を支援する 5泊6日のキャンプである。

鹿児島湾（錦江湾）横断を最終目標に、自分の力でカヌー操船活動を主な活動として移動しながら、6日間で野外炊事、テント泊、シュノーケリングなどの様々な活動に挑戦する。

また、異年齢との交流を通して新たな価値を創造する力、対立等を克服する力、責任ある行動をとる力等の育成も狙いとする。さらに不登校など、心に悩みを持つ児童生徒を積極的に参加させることにより、子供の幸福度や自己肯定感を向上させる。

課題を抱える子供たちを対象としたこの長期キャンプにおいて、以下の 3 点を研究テーマとする。

- 長期自然体験活動が小中学生の生きる力に及ぼす影響
- カヌー活動における小中学生の水分補給状況と適正水分摂取量の解明
- カヌーのスキルテストによる小中学生の身体的・技術的能力の変容の解明

この事業で得られた調査結果は、成果報告書として全国に発信し、体験活動の普及啓発や調査研究を推進し、社会全体で体験活動を通じた青少年の自立を一層促進したい。



目次

はじめに

I 海からのメッセージの推進

- 1. 概要 . . . 1
- 2. 試行・検証等のテーマ . . . 1
- 3. 実施概要 . . . 1
- 4. 企画運営委員会の概要 . . . 2
- 5. 鹿屋体育大学との連携体制図 . . . 2

II 海からのメッセージ事業の内容

- 1. 活動エリアと行程図 . . . 3
- 2. 日程 . . . 5
- 3. 安全対策 . . . 8
- 4. 内容 . . . 9

III 調査結果及び成果、課題

- 1. 長期自然体験活動が小中学生の生きる力に及ぼす影響 . . . 12
- 2. カヌー活動における小中学生の水分補給状況と適正水分摂取量の解明 . . . 16
- 3. 成果 . . . 19
- 4. 課題 . . . 19

IV 事業を終えて

- 1. 企画運営委員長より . . . 20
- 2. スタッフより . . . 20

あとがき

I 海からのメッセージの推進

1. 概要

本事業は、水深200mの深海を有する雄大な鹿児島湾（錦江湾）を舞台に、子供たちの心身の健全な発達を狙いとした5泊6日の長期キャンプである。

鹿児島湾（錦江湾）横断という最終ゴール到達のために、カヌーでの航海を主な活動とし、野外炊事、テント泊などの自然体験活動を通して、成功体験や課題に立ち向かう姿勢など青少年の自立を支援する。また、海の素晴らしさや厳しさを体験することにより、「生きる力」を育む。さらに、不登校など、心に悩みを持つ児童生徒を積極的に参加させることにより、本人のウェルビーイングが阻害されている状況を打破し、子供の幸福度や自己肯定感を向上させるインクルーシブなキャンプである。

2. 試行・検証等のテーマ

本事業を実施するにあたり、重点を置く取組を以下のとおり設定した。

- (1) 長期自然体験活動が小中学生の生きる力に及ぼす影響
- (2) カヌー活動における小中学生の水分補給状況と適正水分摂取量の解明
- (3) カヌーのスキルテストによる小中学生の身体的・技術的能力の変容の解明

※(3)については台風6号接近による日程変更のため未実施

3. 実施概要

(1) 期日

【事前研修】令和5年7月23日（日）（日帰り）

【事業本番】令和5年8月16日（水）～8月18日（金）（2泊3日）

※8月6日（日）～8月11日（土）（5泊6日）で計画していたが、台風6号接近のため日程を変更して実施

(2) 参加者

【対象】小学5年生～中学3年生 16名（男子7名、女子9名）

※不登校など、心に悩みを持つ児童生徒を含む

【人数】小学5年女子：3名

小学6年男子：5名 小学6年女子：2名

中学1年女子：1名

中学2年男子：1名 中学2年女子：1名

中学3年男子：1名 中学3年女子：2名

(3) スタッフ

ア 講師：4名

イ 国立大隅青少年自然の家職員：8名

ウ 法人ボランティア：4名

エ 鹿屋体育大学実習生：4名

4. 企画運営委員会の概要

企画運営委員会の構成

委員長：中村 夏実（鹿屋体育大学 教授兼海洋スポーツセンター長）

委員：笹子 悠歩（鹿屋体育大学 助教）

坂口 陽平（鹿屋体育大学 海洋スポーツセンター専門職員）

江口 智昭（アウトドアショップキャメル 代表）

吉松 純昭（国立大隅青少年自然の家 所長）

役割：事業計画の立案及び策定

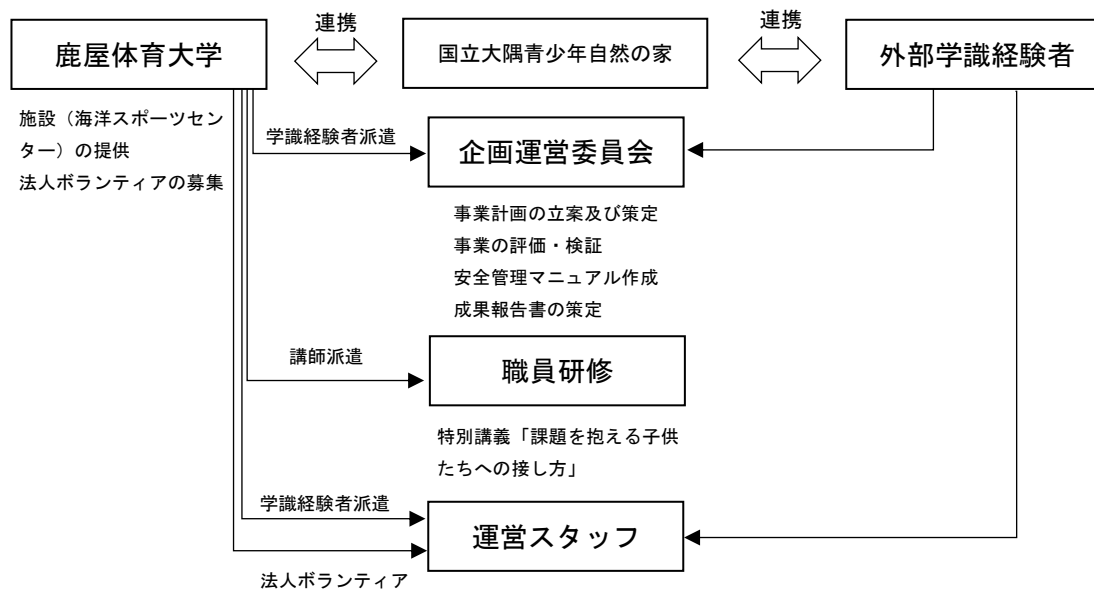
事業の評価・検証方法の企画・立案

安全管理マニュアルの作成

事業の成果や課題の分析

事業の評価・検証及び成果報告書の策定

5. 鹿屋体育大学との連携体制図



Ⅱ 海からのメッセージ事業の内容

1. 活動エリアと行程図

(1) 活動エリア

鹿児島湾（錦江湾）を活動エリアとした。

新城海の家（垂水市）をスタートし、各ポイントを経由して、知林ヶ島（指宿市）を目指す。

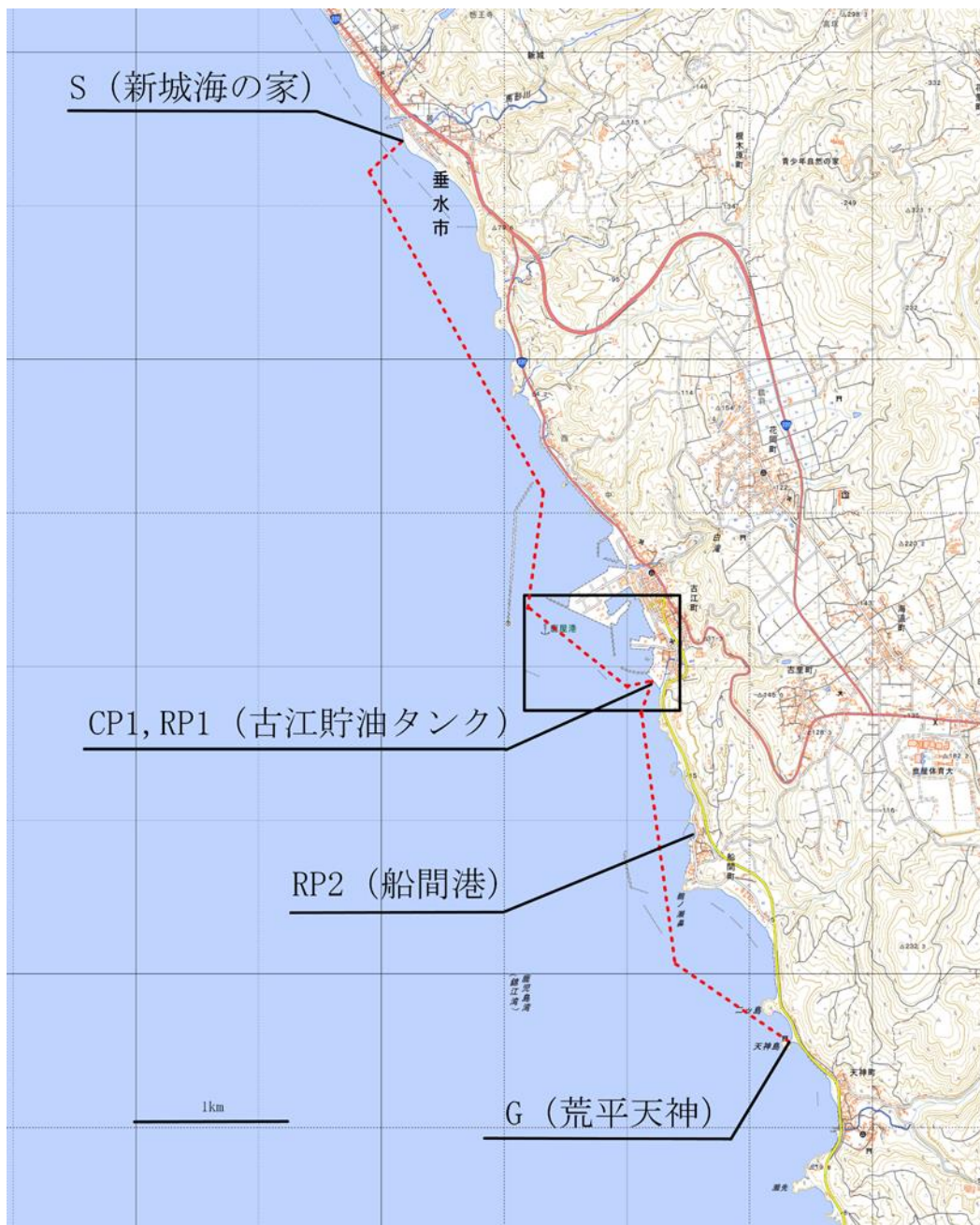
※台風6号接近のため、コースを短縮（荒平天神（鹿屋市）をゴールとした）して実施した。



(2) 行程図

スタートからゴールまでの行程は下図のとおり。

四角で囲んでいるエリアは、漁船の往来が激しいエリアのため、特に注意して航行した。



S = 出発地点、RP = レスキューポイント、CP = チェックポイント、G = 到着地点

出典：地形図について、国土地理院の地理院タイルを加工して掲載した。

2. 日程

本事業は、ボランティア・職員向け事前研修（7月23日）を実施した後、事業本番（8月6日～11日）を迎える予定であったが、台風6号接近による危険回避のため、事業本番の内容・日程を変更し開催した。

(1) 7月23日（日） ボランティア・職員向け事前研修（国立大隅青少年自然の家）

7月23日（日）	
9:45	受付（新城海の家）
10:00	スタッフ紹介・アイスブレイク
11:00	事業の概要説明・海浜施設紹介（カヌー、テント等確認）
11:45	昼食
12:45	本館へ移動（マイクロバス）
13:15	特別講義「課題を抱える子供たちへの接し方」・質疑応答（1時間45分）
15:00	解散

(2) 8月6日（日）～8月11日（金） 海からのメッセージ事業本番（事業内容、日程変更前）

8月6日（日）	
9:45	開講式
10:00	アイスブレイク、オリエンテーション
11:00	テント設営
12:00	昼食（弁当）
13:00	カヌー操船練習
14:30	カヌースキルテスト
16:00	シャワー・洗濯
17:00	夕食（焼きそば）
20:00	班会
20:45	就寝（新城海の家）
8月7日（月）	
6:30	起床
7:30	朝食（ホットサンド）
9:30	カヌー（新城海の家→荒平天神）6.2km
13:30	昼食（弁当）
15:45	シャワー・洗濯
17:00	夕食（ハヤシライス）
20:00	班会
20:45	就寝（新城海の家）

8月8日(火)	
6:30	起床
7:30	朝食(弁当)
8:30	テント撤収
10:00	カヌー(荒平天神→海洋スポーツセンター) 3.4km
11:30	昼食(弁当)
13:00	SUP、シュノーケリング(海洋スポーツセンター)
16:00	入浴(ネッピー館)
17:00	夕食(からあげ定食)
20:00	班会
20:45	就寝(神川地区公民館)
8月9日(水)	
6:30	起床
7:00	朝食(パン)
9:00	カヌー(海洋スポーツセンター→永小原町海岸) 7.6km
12:00	昼食(弁当)
13:00	カヌー(永小原町海岸→神川海岸) 2.0km
15:30	入浴(ネッピー館)
16:30	夕食(炊き肉)
19:30	班会
20:15	就寝(神川地区公民館)
8月10日(木)	
6:00	起床
6:30	朝食(弁当)
7:30	カヌー(神川海岸→知林ヶ島) 11.3km
12:45	昼食(弁当)
14:00	班別自由行動
17:30	夕食(豚汁)
19:30	レクリエーション
20:00	班会
20:45	就寝(休暇村指宿)
8月11日(金)	
6:00	起床
6:30	朝食(パン)
8:00	移動(山川港→新城海の家) フェリー、バス移動
10:30	カヌースキルテスト

12:30	昼食（オードブル）
13:30	掃除・片付け
14:30	閉講式

(3) 8月16日(水)～8月18日(金) 海からのメッセージ事業本番(事業内容、日程変更後)

8月16日(水)	
晴天プログラム	雨天プログラム
9:45	開講式
10:00	アイスブレイク、オリエンテーション
12:00	昼食(弁当)
13:00	カヌー操船練習、レクリエーション
16:00	シャワー・洗濯
16:45	テント設営
17:00	夕食(ハヤシライス)
20:00	班会
20:45	就寝(新城海の家)
8月17日(木)	
6:30	起床
7:30	朝食(ホットサンド)
9:30	カヌー(新城海の家→荒平天神) 6.2km
12:30	昼食(弁当)
14:00	磯観察、SUP(海洋スポーツセンター)
17:00	入浴(ネッピー館)
18:00	夕食(豚汁)
20:00	班会
20:45	就寝(神川地区公民館)
8月18日(金)	
6:30	起床
7:00	朝食(パン)
9:00	軽石クラフト(軽石でガラス作り)
12:30	昼食(オードブル)
13:30	掃除・片付け
14:30	閉講式

3. 安全対策

(1) 安全管理マニュアルの作成

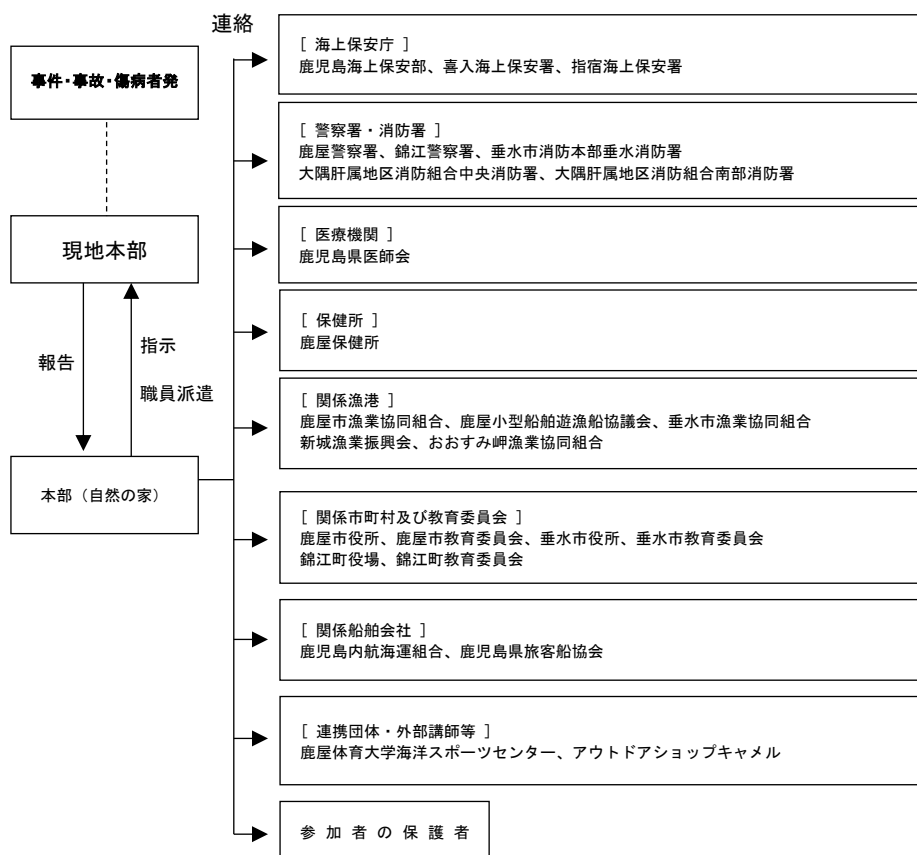
- ア 本事業を実施するにあたり、活動実施可否基準及び事業中の安全管理体制の明確化を目的として、安全管理マニュアルを作成した。
- イ 安全管理マニュアルは国立大隅青少年自然の家の「令和5年度安全管理マニュアル（海浜活動編）」を基に作成し、事業内容に沿った項目（ルート図や関係機関等）を追加した。
- ウ 安全管理マニュアルは事前に海上保安庁に照会し、内容を精査した。
- エ 事前にスタッフ、講師及びボランティアで安全管理マニュアルの読み合わせを行い、安全管理について共通認識を図った。

(2) 活動中の安全対策

- ア 事前に海上保安庁、周辺医療機関、漁業組合等と本事業の概要を共有し、緊急時の対応について協力を依頼した。
- イ 活動中は看護師資格を持つ職員が帯同し、傷病者発生時に速やかに対応できる体制を整えた。

(3) 安全管理体制の構築

本事業実施にあたり、下図のように安全管理体制を構築した。関係する機関には事前に事業概要や人数等の情報を共有し、緊急時に協力いただける体制を作った。



4. 内容

(1) ボランティア・職員向け事前研修

ア 企画運営のポイント

(ア) 本事業は、参加対象に不登校など、心に悩みを持つ児童生徒を含んでおり、特別な配慮や支援をする必要があることから、心理学の専門家である鹿屋体育大学の森司朗教授を講師として招き、「課題を抱える子供たちへの接し方」の講義を行った。

(イ) 事業本番に向けて、スタッフ、ボランティア間の意思疎通やチームワークを高めるため、アイスブレイクの時間を多めに設定し内容を工夫した。

(ウ) 主な活動エリアである新城海の家（当施設の海浜活動施設）にて、より具体的な事業イメージができるように、活動場所の確認や使用物品等の点検を行った。

イ 活動の様子



アイスブレイクの様子



講義の様子

(2) 事業本番（晴天プログラムで実施）

ア 企画運営のポイント

(ア) 参加者が当事者意識や目的意識をもって活動できるように、就寝前に振り返りや翌日の目標を設定し、グループで共有する時間を設けた。

(イ) 他者との関わりの機会を増やし、また相手への理解を深めるため、不登校など、心に悩みを持つ児童生徒と、それに該当しない児童生徒は区別せず、活動毎にそれぞれ班を組んだ。

(ウ) 参加者に達成感、自身の成長や自己肯定感を実感させるため、「錦江湾横断」という明確な目標を設定した。

(エ) 思い出の共有や今後の家庭や学校生活で活かしていくために、参加者が本事業で学んだことや感じたことを最終日に発表する時間を設けた。

※日程変更のため、鹿屋市の観光名所でもある「荒平天神」までの「錦江湾縦断」を新たに設定した。

イ 活動の様子



カヌー操船練習



カヌーレクリエーション



野外炊飯（ハヤシライス）



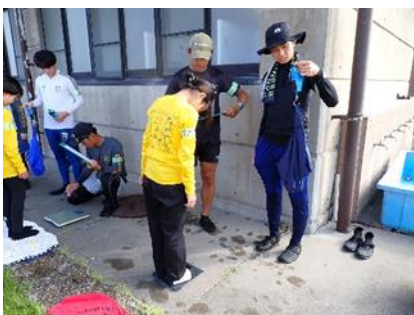
ゴール（荒平天神）での記念撮影



SUP（海洋スポーツセンター）



磯観察（海洋スポーツセンター）



適正水分摂取量の検証



軽石クラフト



振り返り



集合写真

Ⅲ 調査結果及び成果、課題

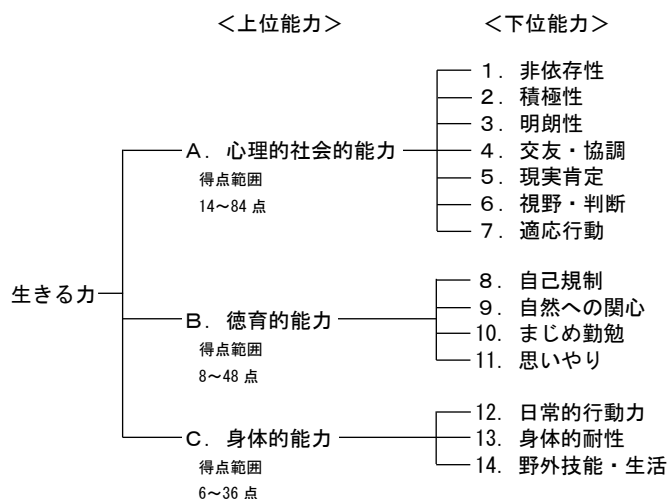
1. 長期自然体験活動が小中学生の生きる力に及ぼす影響

(1) 調査概要

長期自然体験活動の教育効果を評価・検証するため、参加者に事業実施前（1か月前）と事業実施後（最終日）にIKR評価用紙（簡易版）^{注1}を用いたアンケート調査を実施し、「心理的社会的能力」「徳育的能力」「身体的能力」の3つの能力について分析を行い、子供たちの生きる力の変容を明らかにする。特に、課題を抱える子供たちについては、IKRの調査結果に加え、家庭や関係機関への事前・事後の聞き取り調査や事業実施期間中の観察記録等を分析し、意欲を持って活動に取り組む姿勢や集団の中での共通の目標に向かって努力する姿勢等の変容を総合的に評価する。この検証で得られた結果については、次年度以降の同事業における活動内容の選定や、事業計画の策定に活用する。

注1 橘直隆氏（筑波大学）らが開発した「生きる力」を測定するための70項目の「IKR（IkiRu）評定用紙」を基に、簡易にアンケート調査が実施できるよう28項目に絞り込んだアンケート用紙。

(2) IKR調査（簡易版）の評価項目の概要



下位能力の14項目について、各項目あたり2問の設問を「とてもよくあてはまる（6点）」と「まったくあてはまらない（1点）」を両端とする6段階の尺度で回答する。

評価・検証にあたっては、中村夏実氏（鹿屋体育大学教授兼海洋スポーツセンター長）、笹子悠歩氏（鹿屋体育大学助教）の助言・協力の下、実施する。

(3) 調査結果

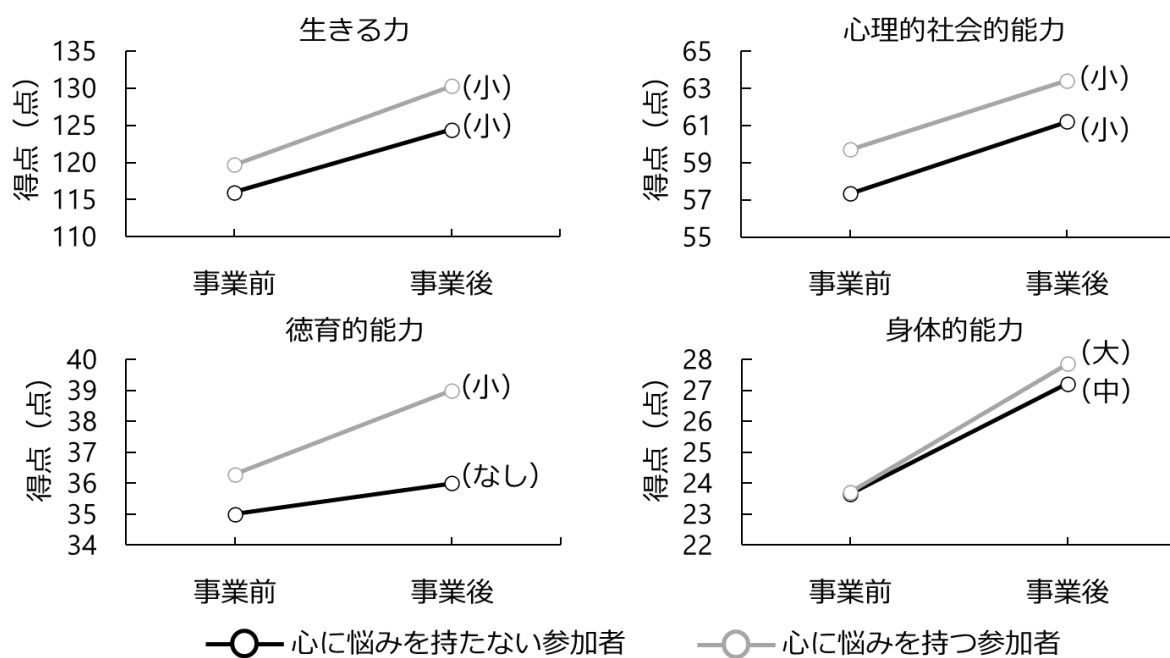


図1 事業前後における生きる力および3つの上位能力の変化

効果量 (d) : なし($d < 0.20$), 小 ($0.20 \leq d < 0.50$), 中 ($0.50 \leq d < 0.80$), 大 ($0.80 \leq d$)

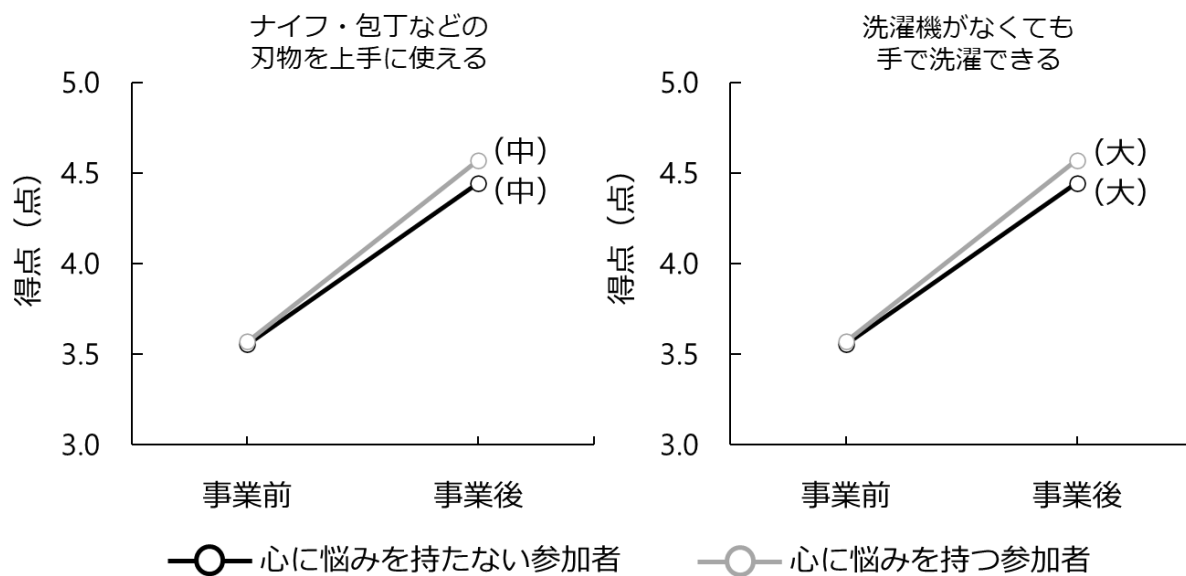


図2. 身体的能力の中で顕著に向上していた二項目の変化

効果量 (d) : なし($d < 0.20$), 小 ($0.20 \leq d < 0.50$), 中 ($0.50 \leq d < 0.80$), 大 ($0.80 \leq d$)

表1. 参加者Pの事業前後における各調査項目の変化

上位能力	下位能力	調査項目	事業前	事業後	変化
心理的社会的能力	非依存	いやなことは、いやとはっきり言える	1	5	4
		小さな失敗をおそれない	2	4	2
	積極性	自分すすんで何でもやる	2	5	3
		前むきに、物事を考えられる	2	5	3
	明朗性	だれにでも話しかけることができる	2	5	3
		失敗しても、立ち直るのがはやい	1	5	4
	交友・協調	多くの人に好かれている	3	4	1
		だれとでも仲よくできる	3	5	2
	現実肯定	自分のことが大好きである	2	4	2
		だれにでも、あいさつができる	4	6	2
	視野・判断	先を見通して、自分で計画が立てられる	1	6	5
		自分で問題点や課題を見つけることができる	3	5	2
	適応行動	人の話をきちんと聞くことができる	5	6	1
		その場にふさわしい行動ができる	1	4	3
徳育的能力	自己規制	自分かってな、わがまを言わない	5	6	1
		お金やモノのむだ使いをしない	5	6	1
	自然への関心	花や景色などの美しいものに、感動できる	1	5	4
		季節の変化を感じる事ができる	1	6	5
	まじめ勤勉	いやがらずに、よく働く	4	5	1
		自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる	4	6	2
思いやり	人のために何かをしてあげるのが好きだ	1	4	3	
	人の心の痛みがわかる	3	4	1	
身体的能力	日常的行動力	早寝早起きである	3	5	2
		からだを動かしても、疲れにくい	5	6	1
	身体的耐性	暑さや寒さに、まけない	1	6	5
		とても痛いケガをしても、がまんできる	3	4	1
	野外技能・生活	ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	1	4	3
洗濯機がなくても、手で洗濯できる		1	4	3	

(4) 結果

- ア 生きる力および3つの上位能力は、全て事業後に向上した。
- イ 徳育的能力については、心に悩みを持つ参加者の方が大きく向上していた。
- ウ 効果量検定の結果、身体的能力については、中および大と評価された。
- エ 身体的能力の下位項目の内“野外技能・生活”の“ナイフ・包丁などの刃物を上手に使える”“洗濯機がなくても、手で洗濯できる”の二つは、心の悩みの有無に関わらず、顕著に向上していた。
- オ 参加者Pは、事業前後でプラスの変化が多く見られた。また、事業後に行った保護者アンケートでは、「自分の不安な気持ちを他者へ伝えた経験が自信につながった様子が見られる」など、本事業によって良い変化があった内容のコメントが得られた。

(5) 考察

- ア 本事業は、台風の影響により、当初予定していた5泊6日から短縮日程（2泊3日）での実施となった。日程の変更に伴い、目標としていた、カヌーでの錦江湾横断も行えなかった。しかし調査の結果、生きる力及び3つの上位能力はすべて事業後に向上しており、特に身体的能力の向上が顕著であった。このことから、本事業のように、参加者自身が食事の準備や洗濯等を自分自身で行うことに加え、カヌーや SUP、軽石クラフトなどの、海を題材として様々な活動を行うプログラムは、2泊3日の日程であっても、生きる力の向上に対して、変化をもたらすものであると考えられる。
- イ 短縮日程となったことに対して保護者からは、「日程短縮は残念だったが、2泊3日になったことは、参加者にとってちょうど良かったと感じる。」という意見があった。このことから、特に心に悩みを持つ参加者にとって、短縮日程となったことは、本事業へ参加することに対する不安が軽減されていた可能性も考えられる。
一方で、事前に申し込みのあった参加者のうち、心に悩みを持つ2名は、事業当日の朝に不参加となった。不参加となった理由について保護者からは、「当日の朝に家から出ることができなかった」との連絡があった。したがって今後は、事業前に個別に連絡をする、又は事前に当該施設で遊ぶ機会を設けるなど、心に悩みを持つ子どもが、より参加しやすくなるような施策を検討していくことが必要であると考えられる。

2. カヌー活動における小中学生の水分補給状況と適正水分摂取量の解明

(1) 調査概要

活動開始前と活動終了後の体重と、活動中に摂取した水分の重量を測定し、その結果から発汗量の推定を行い、活動日のWBGT値^{注2}に応じた適正水分摂取量の検証を行う。この検証で得られた結果については、次年度以降の同事業におけるWBGT値に応じた活動時間の検討や、安全管理に活用する。

注2 人体の熱収支に影響の大きい湿度、輻射熱、気温の3つを取り入れた指標で、乾球温度、湿球温度、黒球温度の値より算出される。

(2) 実施日時

1 日目	活動前 (13:00)	カヌー操船練習・カヌーレクリエーション
	活動後 (16:00)	
2 日目	活動前 (8:30)	カヌー操船 6.2km
	活動後 (12:00)	

(3) 調査結果

ア 体重が大きい参加者ほど、脱水量が多い (図3)。

イ 1日目の活動については、飲水量の平均は210ml (最大390ml、最小60ml)であった。また、体重が大きい参加者でも、飲水量が200ml以下であった者が複数名いたが、体重減少率が2%以上の者はいなかった (図4)。

ウ 2日目の活動については、飲水量の平均は440ml (最大630ml、最小165ml)であった。体重が大きい者の中には飲水量が平均よりも少ない者もあり、体重減少率は16名中8名(50%)が2%以上であった (図5)。

エ 1日目の活動時間は2.8時間、WBGTは29.8 (厳重警戒のレベル[※])、2日目の活動時間は3.6時間、WBGTは29.0 (厳重警戒のレベル)であった

※WBGTの目安は、日本スポーツ協会 熱中症予防運動指針より引用

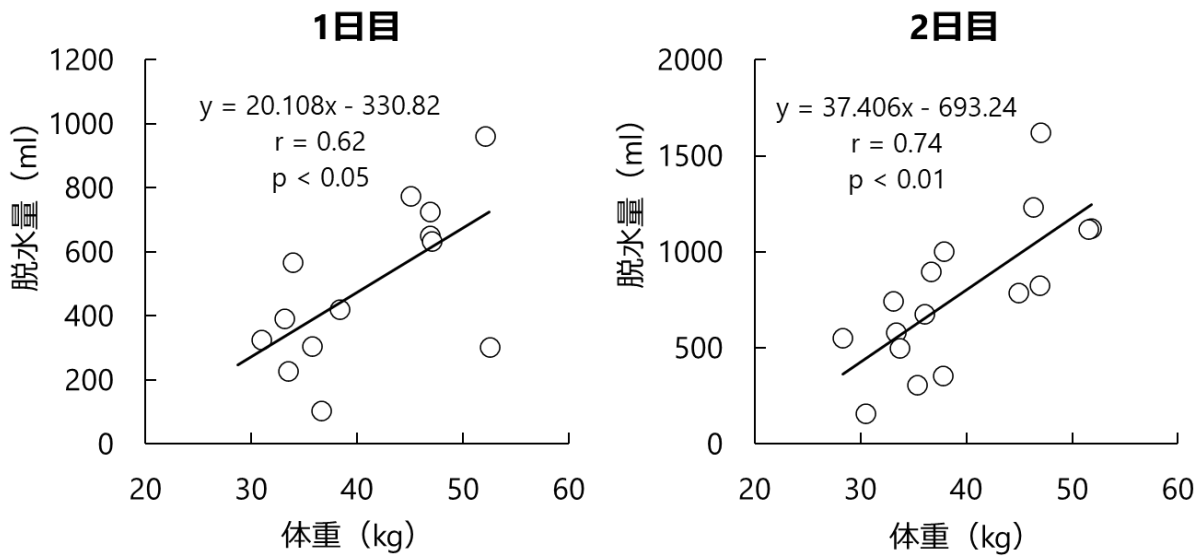


図3. 体重と脱水量の関係
 一日目は体調不良等の理由により、3名のデータが欠損

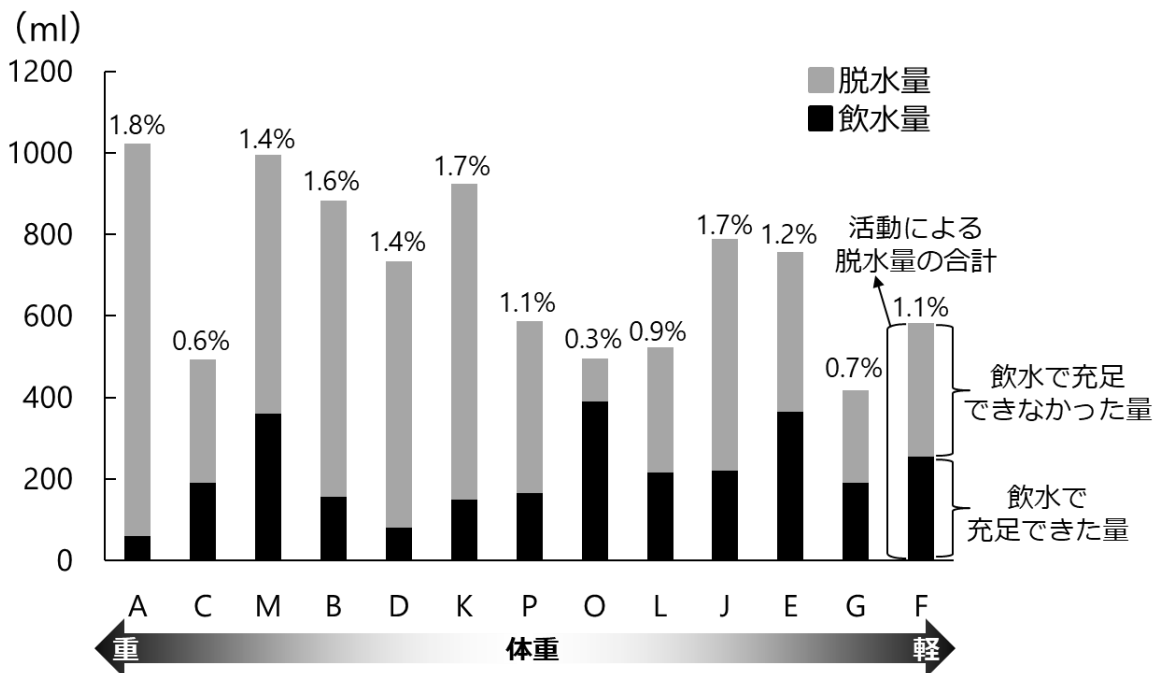


図4. 各参加者の飲水量と脱水量 (1日目)
 グラフ内の数値は、体重減少率を示す
 体重減少率が2%以上の場合は、脱水症の可能性あり

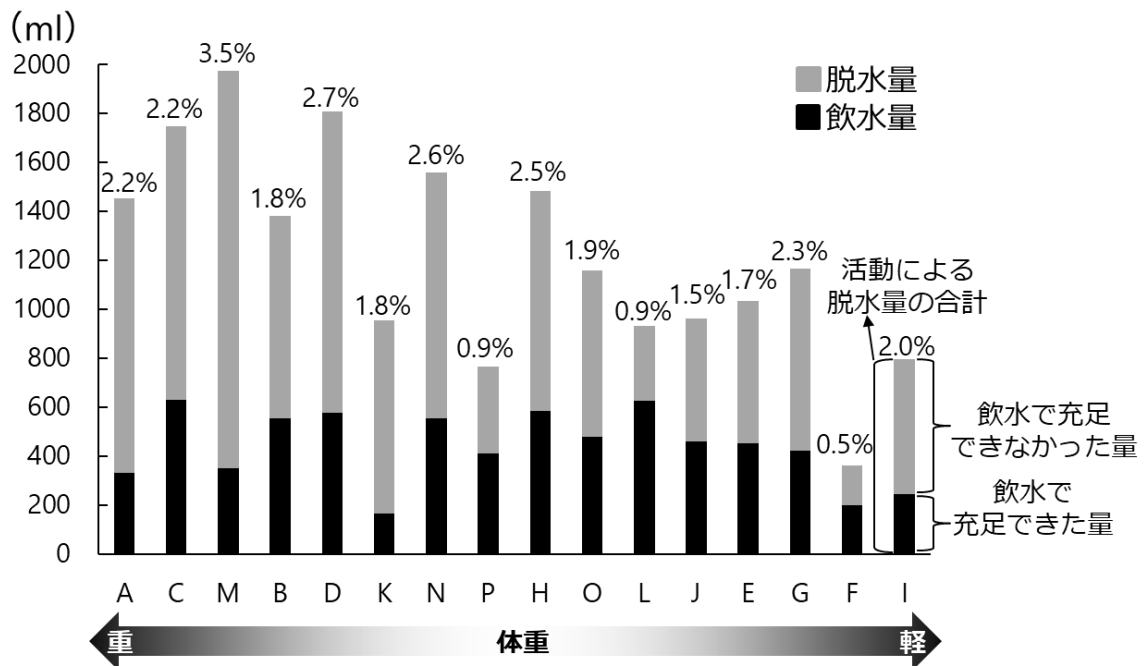


図5. 各参加者の飲水量と脱水量 (2日目の午前)
 グラフ内の数値は、体重減少率を示す
 体重減少率が2%以上の場合は、脱水症の可能性あり

(4) 考察

- ア 飲水量が少なくとも体重減少率が低い参加者も見られるが、これは同じ活動を行ったとしても、運動量や運動強度の違い、および汗を掻きやすい体質などの個人差が要因であると考えられる。
- イ 1日目よりも2日目の方が運動時間も長く、またカヌーを6.2km漕いだため、運動強度も大きかったと考えられる。当日は、水分摂取の機会を多く設けたため、1名を除き体調に問題はなかった。一方で、参加者Mに関しては、体重が比較的大きいにもかかわらず、飲水量が350mlと平均よりも少なかった。その結果、体重減少量も3.5%であり、脱水症の基準となる2%を上回っていた。実際に参加者Mは、活動の途中で体調不良を訴えたため、船酔いに加え、脱水の影響があった可能性が考えられる。

3. 成果

- (1) 事業終了後に実施したアンケートにより、参加者の 94%が満足したとの回答が得られた。
- (2) 時間に余裕を持ったスケジュールを組むことで、参加者・スタッフ共に体調管理に気を配ることでき、WBGT 値厳重警戒の屋外での活動も安全に活動することができた。
- (3) 今後も本調査で行った脱水量や飲水量のデータを蓄積することによって、適正水分摂取量の指標が得られると考えられる。
- (4) 「またみんなに会いたい」「仲間と一緒に頑張ることができてよかった」という声が聞かれ、他者と出会い・交流することの喜びを感じることもできたと考える。
- (5) ボランティアスタッフのアンケートに「ミーティングで事前に指示をもらえていたので自分たちがやるべきことを考えて、行動できた。」との声が聞かれた。今後もスタッフのやりがいや意識向上のため、事前ミーティングを実施することを徹底したい。
- (6) 事業終了後のスタッフの満足度が高く、参加者・スタッフ共に充実感を得られた。

4. 課題

- (1) 水分摂取の声かけは頻繁に行っていたが、飲水量には個人差があり、声かけのみでは不十分であった参加者もいたことが考えられた。そのため、飲水量の少ない参加者には必要な水分摂取量の声かけを実施したい。
- (2) 心に悩みを持つ参加者のうち、2名が当日に不参加となった。事業に参加するまでの不安を取り除くため、必要に応じて、事前にやりとりを行ったり、顔合わせしたりするなどの対応を検討する。
- (3) 夜間も気温が高く、参加者から「テントが熱くて眠れなかった」との声も聞かれた。今後、テント泊の実施方法・実施の有無の検討が必要である。
- (4) 猛暑による熱中症の恐れがあることや、台風の影響があることから、開催時期の検討が必要である。

IV 事業を終えて

1. 企画運営委員長より

昨年に引き続き、台風接近の影響を受け予備日での実施、かつ短縮日程での開催となったことは残念でした。しかし、「成功体験や課題に立ち向かう姿勢を育成すること」や、「ウェルビーイングが阻害される状況を打破する」といった事業目的に対しては、短期間であっても、相当の機会提供になったのではないかと思います。1日目のカヌー練習日には、風の影響で波が残る海面から一転して、新城海の家から荒平天神までの6.2kmの漕破を達成した2日目は穏やかな平水面でした。長い距離を漕ぐ大きな課題を達成する成功体験と同時に、異なる海象を実感してくれたものと思います。さらに、磯観察も楽しみ、漕破後の疲労感など感じさせぬ様子でした。3日目のクラフトも含め、自然の中に身をゆだねた3日間で、「海からのメッセージ」を大いに受け取ったと感じられました。「生きる力」の総点には大きな変化を与える事業期間ではありませんでした。下位尺度のいくつかの得点には効果の兆しがみられることから、目的に相当する事業内容であったと評したいと思います。

また、カヌー活動中の水分摂取量は、摂取のタイミングが同時期になるためか参加者間で大きな差が生じにくいことが観察されました。一方で、脱水量は体格の大きな参加者ほど大きいことは容易に想定できますので、体格の大きい参加者ほど水分摂取量の不足に注意が必要と思われました。しかし、本事業内ではデータ数が少なく、適正量の目安を示すには至りませんでしたので、これについては今後の継続課題といえます。

国立大学法人鹿屋体育大学 海洋スポーツセンター長 中村 夏実

2. スタッフより

(1) 企画指導専門職付係員 泊野 那月

初日から表情に緊張感がある参加者がおり、特に気をつけながら事業を行っていました。2日目には輪に溶け込むようになり、3日目から表情が明るくなり笑顔が見られ、短期間とはいえ、共通の課題に力を合わせて取り組むことの重要性をとっても感じました。また、保護者自身が子供を海からのメッセージに参加させることを不安に感じている様子が事前のアンケートで伺えました。しかし事業後アンケートで「とても不安だったが、迎えの時、娘の顔を見てほっとした。」「これまでアウトドアに全く興味を示さなかったが、また来年も行きたいと言っており予想外の反応に驚きました。」など、保護者にとって子供を送り出す自信に繋がっている様子がうかがえ嬉しく感じました。

(2) 事業推進係主任 三原 涼

5泊6日の長期キャンプの予定が2泊3日での開催となり、子供たちのモチベーションはどうだろうか？目的を見出すことはできるのか？と不安でしたが、初日に子供たちのやる気と希望に満ちた目を見て、不安は一気に解消されました。そして、短期間にもかかわらず仲間と助け合い、支え合いながら課題に挑戦し、乗り越え成長する姿を見ることができました。

今回のキャンプでの経験を活かし、今後も仲間と協力し支え合いながら何事にも挑戦してほしいと思います。

(3) ボランティアより

ア カヌーは想像よりも大変だったけれど、子供たちが小さい体で一生懸命頑張っている姿を見て私も頑張ろうと思いました。この3日間は子供たちだけでなく私たちの成長にもつながりました。

イ 子供たちそれぞれに個性があり、ひとりひとりの子供への接し方を考えながら関わるというところに難しさと楽しさを感じました。自分自身もカヌーを初体験したり、子供を指導したり、成長できた面があったため、これからの人生に活かしたいです。

ウ 開始前、自分が参加者に多くのことを教える形になると考えていました。しかし、逆に子供たちから教えてもらうことが多くありました。その一つが、遊びは全力で楽しむことです。気づいたら寝ていたというくらいまで遊ぶことを最近はできていないので、そうなれるよう頑張ろうと思いました。

あとがき

「海からのメッセージ事業」は、従来からこれまで行ってきた事業でしたが、当事業を通じて青少年の生きる力の向上に対してより有効なプログラムを提供し、また、長期自然体験活動を通して心に悩みをもつ青少年の自立を支援するという狙いで行っています。令和5年度の当事業は、当初、8月6日（日）～11日（金）の5泊6日で行う予定でしたが、台風6号の影響により次週8月16日（水）～18日（金）の2泊3日に変更して実施しました。

事業の研究テーマは、連携いただいている鹿屋体育大学海洋スポーツセンター（以下「海洋スポーツセンター」）と相談しまして、①長期自然体験活動が小中学生の生きる力に及ぼす影響、②カヌー活動における小中学生の水分補給状況と適正水分摂取量の解明、③カヌーのスキルテストによる小中学生の身体的・技術的能力の変容の解明としました。台風の影響により期間短縮と行程変更のため、③は、未実施となりましたが、①②は、事業内容を組み直して実施しました。1日目は、事業本番に向けて、子供たち、スタッフ、ボランティア間の連携強化のため、アイスブレイク、オリエンテーション、レクリエーション等の時間を多めに設定しましたほか、2日目に備えてカヌー操船練習を重点的に行いました。2日目の午前中は新城海の家（以下「海の家」）から荒平天神までのカヌーを計画し、同日午後から海洋スポーツセンターでのSUP等の海浜活動を行い、錦江町神川で宿泊しました。最終日の午前中は海の家に戻って軽石のクラフト活動等を行いました。最終日に子供たちの当事業に対する感想を聞く機会を設けたところ、子供たちが発表した内容や笑顔から充実した3日間を過ごすことができたことを確認しました。

事業実施前後のデータ測定は、前もって子供たちに周知していたこともあり、スムーズに進捗しました。今回は、台風による日程変更等の影響で長期自然体験活動によるデータ収集が難しいものでしたが、今後は、今回のデータを手始めとしてデータ収集を数多く行って課題を抱える子供たちも含めて長期自然体験活動が生きる力に及ぼす影響や水分補給状況と適正水分摂取量に関する研究面の一助になることを期待します。

最後に、今回、当事業に不登校など、心に悩みを持つ児童生徒が参加していることから、スタッフ、ボランティアを対象とした講義を担当いただきました鹿屋体育大学の森司朗様、当事業の企画運営委員会委員長やカヌー等の指導面でもご協力いただきました鹿屋体育大学海洋スポーツセンター長の中村夏実様をはじめ、榮樂洋光様、笹子悠歩様、坂口陽平様、また、当施設の教育事業や海浜活動等においてもご指導いただいています江口智昭様、鹿屋体育大学の学生スタッフ、法人ボランティアの皆様には、3日間ご支援ご尽力をいただきました。さらに、当該事業を実施するに当たり、関係機関・団体・企業の皆様から多くのご支援・ご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

国立大隅青少年自然の家所長 吉松純昭



令和5年度 海からのメッセージ 成果報告書

独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立大隅青少年自然の家

〒891-2396 鹿児島県鹿屋市花里町赤崩
TEL：0994-46-2222 FAX：0994-46-2540
E-mail：osumi@niye.go.jp
URL：https://osumi.niye.go.jp/